

# 「赤れんが商家」がつなぐ 交流・文化発信拠点

…絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト【高知県香南市】



## 団体設立経緯

設立年月	…… 2014年11月
メンバー数	…… 20人
代表者名	…… 北山 めぐみ(きたやま・めぐみ)
連絡先	〒783-8508 高知県香南市物部乙200-1 高知高専
電話	088-864-5583 FAX 088-864-5583
メールアドレス	kitayama@ce.kochi-ct.ac.jp
facebookページ	<a href="https://www.facebook.com/akaokamachiya/">https://www.facebook.com/akaokamachiya/</a>
＜団体のミッション＞	わたしたちは、高知県香南市赤岡町を舞台に、高知高専と若手建築家有志が地域住民と連携し、「赤れんが商家」の再生を通してまちづくりの実践を通して、多様な主体による持続可能なまちづくりを目指しています。

「絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト」は、2014年12月、高知県香南市赤岡町に位置し、解体の危機にあった町のシンボル「赤れんが商家」の再生・活用を目指して、高知高専の学生と教員、若手建築士、地域住民らが主体となって設立されました。この商家を再生していくプロセスを通して、地域に愛着を持つ若手技術者を育成し、高知の伝統構法の次世代継承、持続性のあるコミュニティづくりを目指して活動しています。

## 地域概要

香南市赤岡町は、高知県中部の沿岸に位置する小さなまちです。幕末の絵師・金蔵が描いた芝居絵屏風を飾る「絵金祭り」で全国的に知られる一方で、多くの地方とともに、高齢化・空き家・空き店舗の増加が課題となっています。しかし、コミュニティの小ささを生かしたまちづくりが20年以上継続して行われてきており、道端にこたつを置いた「冬の夏祭り」、地域住民が演じる「土佐絵金歌舞伎」などオリジナリティ溢れる地域づくりが展開されています。

## 活動に至った背景や理由

赤岡町のまちづくりの根底にある“あるもん生かす”という考え方から、これまでも米蔵や銭湯など身近な建物を生かした拠点整備を行ってきました。こうした活動が伝搬することで町並みが形成されていきますが、人口減少や高齢化に伴い現在の拠点運営が主となっていました。そんな中、地域のシンボルの消滅の危機が機となり、学生、専門家が地域と連携することで、町のアイデンティティを継承した次世代のまちづくりへと緩やかに移行していくチャンスとなり展開してきました。

## 活動内容と成果

赤れんが商家は初代村長の邸宅であり、町の中でもひときわ目を引く大きな商家です。これを何とか次の世代に継承したいと立ち上がったのが2014年12月でした。空き家となり、老朽化も著しかったため、活動1年目は劣化箇所の修繕に注力とともに活動の周知を行ってきました。活動2年目となる今年度は、「①心地よい居場所づくりと交流・文化発信拠点として活用を試みること」、「②地域内外への情報発信」、「③活用・運営方法の具体化」を目標として活動を進めてきました。

### 1.心地よい居場所づくり・交流・文化発信拠点としての活用

赤岡町には、幕末に描かれた芝居絵屏風を展示・収蔵する「絵金蔵」、地歌舞伎を演じる歌舞伎小屋「弁天座」があり、高知県内はもとより全国から見学客が訪れます。赤れんが商家もこうした文化拠点の一つとして機能することで赤岡での生活やまちあるきをより豊かにし、地元の人たちも気軽に立ち寄れる交流拠点としても活用したいと考えています。そこで今年度は、昨年から行ってきた赤れんが商家を活用した演劇をバージョンアップさせるとともに、教室としての利用、誰でもふらっと立ち寄れる休み場としてのお試し利用を試みることで、活用の可能性を広げてきました。

演劇では、初めて5名の役者・演出を迎え、照明や音響設備も備えた本格的な演劇空間を演出し、三島由紀夫の近代能楽集「葵上」を上演しました。上演に向けて舞台を整えるための改修ワークショップを学生・建築士を中心となって行いました。ここでは昨年までの劣化の止めを主眼とした作業から、来訪者の居場所を作るという新たな目標に向かうことができ、来客が開演を待つことのできるホワイエが生まれました。沢山の人が訪れる「絵金祭り」での上演であったため、座席数30席という小さな芝居小屋は瞬く間にキャンセル待ちとなっていましたが、「弁天座」では絵金歌舞伎、赤れんが商家では現代劇と、文化芸術でまちをつなぐ二日間となりました。

また、秋には高知高専の国語教員・佐藤元紀氏の協力を得て、赤岡小学校に勤めた近代詩人「岡本弥太」をテーマに資料探しから始め、文学散歩を企画・運営し、文学の秋を楽しんでいただきました。冬の夏祭りでは通り沿いの建物を双六のマスにみたてた「まちすごろく」を開催しました。



そして、2017年3月からは、ホワイエとなった土間空間を生かしてコーヒーを淹れ、まちのひとや来訪者とコミュニケーションを図ることを目的とした「コーヒー入ってます♪」というイベントを第2・第4火曜日に開催することにしました。ここでは、朝から夕方まで赤れんが商家で過ごすことで、どんなひとが赤岡を訪れるのか、赤れんが商家が地元や来訪者に対してどんな役割が果たせるのかを具体的に考えることができ、人ととの距離が近づいてきました。また、おいでくださった方が赤れんが商家をじっくりと見ることで、「水道なおしゃら」「ここもっとキレイにしたら？」といった改修のアイディア・段取りまでできてきました。さらに座敷空間では着物教室を開催したところ、土間とは異なり、仲間内での賑やかで親密な時間を過ごすことができ、土間空間とはかなり質の異なる空間であることがわかつてきました。このように、実際に「やってみる！」ことを重ねることで、文化・交流拠点としての役割、そして本格的な改修に向けてどこを直せばどちらに使えるか、ということも見えてきました。次年度は、初の試みとして、赤れんが商家で紡がれてきた暮らしをパフォーマンスとして表現する企画も考えており、赤岡らしい文化・交流拠点としての形を模索し続けます。



## 2.地域内外への情報発信

活動を知ってもらう、見守ってもらうこと自体が私たちにとって支援になるという考え方から、昨年度から毎月、赤岡町1,200世帯を対象とした地域広報誌「あかおかわらばん」を発行してきました。今年度は、より多くの人に活動を知ってもらい、イベントに参加してくださる人、継続的に関わってもらう人を見つけるツールとして活用することを目指し、隔月発行に変更し、広報内容を経過報告のみではなく、赤岡の歴史やまちのお店などにも注目した記事を掲載することにしました。実際に赤れんが商家の大家さんや商店主にインタビューを行い、ワークショップ報告は学生たちが執筆を担当しました。また、Facebookでは写真を中心に報告を行い全国にも向けた情報発信をしてきました。これにより、「あかおかわらばん」はどこで手に入るのかといったお問い合わせやwebに載せて欲しいという要望もいただき、現在ホームページの立ち上げを進めているところです。

## 3.活用・運営方法の具体化

これまで自分たちのできることから修繕・活用を図っていましたが、やはり建物の状況からは大規模な修繕が必要であること、地元での運営組織が欠かせないことから、市・県の補助事業を活用して修繕しようという方向性が定まり、2016年9月～11月に住民・行政・専門家・学生が参加し「産官学民」が連携した「赤れんが商家活用ワークショップ」を開催しました。第一回目は「使い方のイメージを膨らませる」と、第二回目は「1年間通した活用と運営組織を考える」、第3回目は「改修イメージを膨らませる」をテーマに話し合いをおこないました。これにより、参加者全員が「赤れんが商家を残して活用していきたい」という思いを共有するとともに、いろんな使い方ができそうだ！というアイディアを膨らませることができました。しかし、誰がやるの？どうやって運営していくの？運営費はどこから？といった具体的な答えを見つけることができませんでした。赤岡町はユニークなまちづくりを20年以上展開してきたことで知られ、今でも自由な発想力と実行力が魅力的なまちです。ただ、ワークショップに積極的に参加してくれたのは20年前から活動してきた人々を中心であり、彼らはすでに「絵金蔵」「弁天座」という活動の場を持っており、これ以上仕事を増やすことはできず、新たな担い手を発掘しなければ運営方法が見えてこない状況でした。さらには「絵金蔵」「弁天座」の運営においてもその当時からがんばってきた人々が中心となって活動が行われ、若手への活動の継承が課題となっていることも見えてきました。こうした悩みを抱えながらワークショップを進める中で、偶然にも、これまで赤岡とも縁があり同じ香南市内出身の若手が加わることとなりました。彼は、まちづくりやNPO運営の経験を持ち、また料理を通して地域を幸せにしたい、という夢を持っていたことから、赤れんが商家の運営に携わることを決断しました。そして彼の加入によって、上に挙げた「コーヒー入ってます♪」の企画が始まりました。地元の若手の人々との交流も徐々に増え、「自分たちで全部を背負わなくてもいい、みんなで分担できる」というイメージができてきたのか、2017年度に若手を中心とした赤れんが商家の運営組織が立ち上がる流れができました。また、「絵金蔵」「弁天座」のような特定の用途を持たない施設であることから、「赤岡を起点とした香南市のまちづくりを担う」組織として、今まさに動き出そうとしています。



## 課題と解決策

今年度は、ようやく関係者が顔を付き合わせて赤れんが商家の活用方法を検討するワークショップを開催することができ、まちづくり拠点としての立ち位置を見出すことができました。しかし、ワークショップへ積極的に参加したのは20年前からまちづくりに携わってきた人々が多く、すでに手元に多くの仕事を抱えており、新たな組織をつくりしていく具体的な方向性は見えていませんでした。そんな状況の中、祭りなどのイベントではない平日に「コーヒー入ってます♪」を開催しました。すると、朝から夕方まで赤岡町で過ごすことで、地元の若者や先輩方から来訪者まで、様々な層の人々の声を聞くことができ、これまで見守りに徹していた人々も商家をじっくりと眺め「水道なおしゃら」、「扉の開け閉めやったらできるで」など、具体的な活動や関わり方に発展し、さらには組織づくりへもシフトすることができました。限られた時間で一つの方向向いて話すだけでなく、実際にそこで何かを行い、長い時間を過ごし、顔を合わせることの重要性を感じました。



中四国アートマネジメント研修

## 今後の予定

現在、赤れんが商家の運営と赤岡を起点としたまちづくりを進めていくための組織づくりが進んでいます。今後は、この組織が中心となって赤れんが商家の活用ワークショップをさらに進め、2017年度の夏頃からは本格的な設計へとシフトし、2018年度に市・県の事業を活用して改修することを予定しています。しかし、これまで自分たちの手で直してきた経緯から、一気に整備してしまうのではなく、自分たちの手で何年もかけて、使い方に応じて徐々に整備していきたいという思いも膨らんでいます。赤岡らしい再生の仕方を模索しながら、これからも進んでいきます。